

金融論

小泉
山下
邦男
明編

青林書院新社

◆編者・執筆者および執筆分担◆

元一橋大学学長 小泉 明 編
一橋大学教授 山下邦男

山下邦男（一橋大学教授）	第1章
鈴木満直（小樽商科大学教授）	第2章
丹羽 昇（富山大学助教授）	第3・7章
清水啓典（一橋大学助教授）	第4・6章
村本 孜（成城大学助教授）	第5章
丹羽 明（関西大学助教授）	第8章

〔執筆順〕

金 融 論

基礎経済学大系 8

昭和53年9月5日 初版第1刷発行
昭和58年3月30日 初版第3刷発行

検 印
廃 止

編 集 者 小 泉 明
山 下 邦 男
発 行 者 逸 見 俊 吾

発行所 株式会社 青林書院新社

郵便番号 113
東京都文京区西片 1-3-17
電話 03 (815) 5897
振替口座 東京 1-16920

印刷・真正社／製本・難波製本
1333-06080-3862

落丁・乱丁本はお取り替えます。
© 1978

は し が き

本書は金融理論をできるだけ平易に説明しようとするものである。本書のこのような特徴は、『基礎経済学大系』の中の一冊であることから当然のことであろう。だが、できるかぎり新しい金融理論を取入れるように努力したので、本書を読破すれば、読者は金融論のアウトラインを把握することができるであろう。

最近の金融の理論、政策ならびに金融機関に関する研究のテンポはきわめて急速である。それゆえ、一人の研究者がそれらのすべてを取扱うことは非常に困難である。本書が数人の研究者の共著となったのは、このような事情に基づくものである。最新の金融論の成果を取入れることは、知力と体力が充実している新進気鋭の若手研究者にまたなければならない。本書の執筆にあたって、小生以外はすべて若手研究者をあてたのは、このような理由からである。もしも、小生が本書の作成になんらかの寄与をしたとするならば、これらの若手研究者の執筆に余計な干渉をしなかったことだといえるかもしれない。

本書は8章から構成されている。第1章「貨幣の定義と機能」では、貨幣の機能に即した定義ならびに貨幣概念の拡充について説明し、また貨幣の保有動機に関連して、最近重視されている資産貨幣の概念に言及している。第2章「金融機関と金融市場」では、各種の金融機関の業務と機能、金融市場のメカニズム、わが国の金融組織の特徴について述べている。第3章「資金の流れと資金循環分析」では金融分析に不可欠の資金循環表（マネーフロー表）の意義ならびにその見方が詳細に説明されている。第4章「貨幣と物価」では、古典派経済学の貨幣ヴェール観をケインジアンの立場から批判し、旧貨幣数量説から新貨幣数量説への発展過程が考察されている。さらに、これらの理論的考察に基づいて、貨幣と物価との関連について若干の実証分析が

ii はしがき

なされている。第5章「金利の機能」では、わが国の各種の金利の制度的決定メカニズム、金利の資金配分および景気調整機能を説明し、ついで利率決定の諸理論を説明し、最後に金利と貯蓄率の関係を考察し、それに基づいて金融資産選択に言及している。第6章「最近の金融理論」では、ケインズ以後に発展した近代的金融理論が考察されている。ここで考察の対象として取上げられているのは、貸手分析の観点からみた信用のアヴェイラビリティ理論、富効果、トービンによって展開された資産選択の理論ならびにケインズ理論とマネタリズムの論争である。第7章「金融機関の行動分析と金融組織の効率」では、金融機関の行動原則を解明しようとしたもので、金融の効率化、金融機関の規模の利益、競争、集中・合併、業務の多様化等多岐にわたる問題が説明されている。第8章「金融政策」では、金融政策の目標および手段、政策効果の波及経路とタイムラグ、政策の運営目標、国債管理との関連等の諸点が述べられている。

本書の刊行の経緯を述べると、もともとは青林書院新社が一橋大学学長故小泉明博士に編纂を依頼したところ、学長の激職につかれていた先生が小生に編纂に当たるようにとの御意向を示されたことに端を発するものである。非力の小生は先生と共同で編纂に当たるという諒解の下で取りかかったのがあったが、不幸にも先生は昭和52年2月8日に卒然として逝去された。このため、小生が一人で編纂に当たることになったが、大過なく編纂することができたのは、まったく先生の御遺徳のたまものである。ちなみに、共同執筆者のうち鈴木満直小樽商科大学教授を除いた、村本孜成城大学助教授、清水啓典一橋大学専任講師、丹羽昇富山大学専任講師、丹羽明関西大学専任講師は、いずれも小泉先生の直接または間接に御薫陶を受けたひとりとである。このような事情によって、本書を小泉先生と小生の共編という形で刊行することにした。泉下の先生は「あまり大したことはないね」と例の温顔で失笑されるかもしれない。なおこの点については、昭和53年2月5日の先生の一周忌の法要の際に、茂子未亡人の御諒解を頂戴したことを付記する。

最後に、共同執筆者の方々の御協力に感謝するとともに、原稿作成が大幅におくれて多大の御迷惑をかけたのに、終始寛容な態度をとられた青林書院新社の稲葉文彦氏に厚く御礼申上げる。

昭和53年7月16日

山下邦男 記

基礎経済学大系(全15卷)

- | | | | | | | | |
|--------------------|--------------------|-------------------------|------------------------------|------------------------------|------------------------------|---------------------------------------|-------------------|
| ★8
金
融
論 | ★7
財
政
学 | ★6
經
濟
策 | ★5
日
本
經
濟
史 | ★4
一
般
經
濟
史 | ★3
經
濟
学
史 | ★2
マ
ル
ク
ス
經
濟
学 | ★1
經
濟
学 |
| 小泉 明・山下邦男編 | 宇田川・中桐・西野共著 | 伊藤善市・加藤 寛編 | 宮本又次編 | 堀江保蔵・角山 榮編 | 玉野井芳郎・早坂 忠編 | 佐藤金三郎編 | 伊達邦春・田中駒男編 |
| ★15
經
営
学 | ★14
會
計
学 | ★13
社
會
政
策 | ★12
國
際
金
融
論 | ★11
國
際
經
濟
学 | ★10
計
量
經
濟
学 | ★9
統
計
学 | |
| 宮川公男編 | 若杉 明編 | 石田 忠・小川喜一編 | 金森久雄・荒木信義編 | 渡辺太郎編 | 森口親司編 | 溝口敏行・刈屋武昭編 | |

A5判 / 上製 / 美麗ケース入
各巻三〇〇〜三五〇頁 / ★印 既刊

目 次

はしがき

第1章 貨幣の定義と機能	3
【概 説】	3
I 定 義	4
II 貨幣の発展	7
1 商品貨幣.....	7
2 名目貨幣.....	8
3 預金貨幣.....	9
4 準貨幣.....	11
III 貨幣の機能と保有動機	13
1 貨幣の機能.....	13
2 貨幣保有の動機.....	16
IV 貨幣供給の原則と貨幣制度	19
1 貨幣供給の原則.....	19
2 金本位制度と管理通貨制度.....	21
V 貨幣供給の経路.....	22
〔演習問題〕	25
〔参考文献〕	26
第2章 金融機関と金融市場	27
【概 説】	27
I 金融組織	28
1 商業銀行と金融仲介機関.....	28
2 普通銀行と専門金融機関.....	32

ii 目 次

II 金融機関の活動と金融資産の進出	36
1 金融機関の受信業務	36
2 与信業務	37
3 信用創造	38
III わが国の金融機関	39
1 日本銀行	39
2 普通銀行	41
3 長期金融機関	42
4 中小企業専門金融機関	43
5 政府金融機関	44
IV 金融市場	44
1 直接金融と間接金融	44
2 金融市場における資金供給	46
V わが国金融構造の特色	48
〔演習問題〕	50
〔参考文献〕	51
 第3章 資金の流れと資金循環分析	52
【概 説】	52
I 資金の流れ	52
1 貨幣の産業的流通	53
2 貨幣の金融的流通	54
3 貨幣の財政的流通と国際的流通	56
II 資金過不足の意味	57
III 資金の需給と金融市場	60
IV 金融資産の蓄積	62
V 資金循環分析	64

1 資金循環表の説明	64
2 資金循環分析の意義と問題点	68
3 わが国における資金循環の変化	71
〔演習問題〕	75
〔参考文献〕	76
 第4章 貨幣と物価	 77
【概説】	77
I 貨幣ヴェール観の批判	78
1 古典派の二分法	78
2 二分法の矛盾	80
3 貨幣の中立性	82
II 貨幣と物価の理論	84
1 古典派の貨幣数量説	85
2 新貨幣数量説	91
3 貨幣とインフレーション	99
III 貨幣と物価の関係	106
1 実証研究の展望	106
2 マネー・サプライ重視の金融政策	112
〔演習問題〕	116
〔参考文献〕	117
 第5章 金利の機能	 119
【概説】	119
I わが国における主要な金利	120
1 金利の概念と長・短金利	120
2 主要金利とその決定方式	122

iv 目 次

3 自由金利と規制金利——わが国金利の特色	127
4 金利体系とその歪み	129
II 金利の機能	131
1 景気調整機能	131
2 資金配分機能	135
3 金利自由化論	137
III 利子理論	140
1 利子学説小史	140
2 貯蓄投資の利子率決定理論	141
3 流動性選好理論	145
4 IS-LM 分析	147
5 利子率構造の理論	148
IV 金利と貯蓄率	152
1 利子率と貯蓄の理論的關係	152
2 わが国における金利と貯蓄率の關係	154
〔演習問題〕	158
〔参考文献〕	158
第6章 最近の金融理論	160
【概 説】	160
I 信用のアヴェイラビリティ理論	160
1 歴史的背景	161
2 理論の内容	163
3 問題点の検討	165
4 評価	167
II 富効果	168
1 理論的意味	169
2 富の定義	170

3 金融政策と富効果	172
III 資産選択の理論	176
1 価格理論との対応	177
2 不確実性の意味	178
3 期待効用最大化仮説	179
4 経済主体の選好	182
5 機会集合	183
6 貨幣と危険資産のあいだの選択	185
7 ふたつの危険資産	187
8 分離定理	191
IV マネタリスト論争	192
1 論争の背景	193
2 貨幣の影響	194
3 財政政策の効果	196
4 インフレ＝失業のトレード・オフ	197
5 利子率とインフレ期待	199
6 経済の内在的安定性	200
7 安定化政策の分析視野	201
〔演習問題〕	202
〔参考文献〕	202
第7章 金融機関の行動分析と金融組織の効率	205
【概 説】	205
I 銀行行動の分析理論	205
1 銀行行動の特殊性	205
2 信用創造理論と銀行の主体的均衡	207
3 わが国の銀行行動	211
II 銀行の資産選択	217

vi 目 次

1 有価証券投資	217
2 貸出	219
III 金融組織の機能と効率	222
1 金融効率化の意味	222
2 金融機関の競争	227
3 銀行の規模の利益	230
4 業務の多様化	232
5 金融の集中と銀行合併	234
IV 最近の金融再編成について	235
〔演習問題〕	239
〔参考文献〕	239
第8章 金融政策	240
【概 説】	240
I 金融政策の目標	241
II 金融政策の手段	246
1 金利政策	246
2 公開市場操作	248
3 支払準備率政策	251
4 選択的金融政策	255
5 窓口規制	256
III 金融政策の波及経路	257
1 資本コスト効果	258
2 富効果	258
3 信用のコストおよびアベイラビリティへの影響	259
4 ポートフォリオ調整効果	261
5 アナウンスメント効果	262
IV 運営目標と金融指標	264

1 中間目標の必要性	264
2 中間目標の選択	266
3 タイム・ラグ	270
V 国債管理と金融政策	271
1 国債管理の定義	271
2 国債の経済的効果と国債管理の目的	273
3 国債管理と金融政策	275
4 米国における国債管理の経験	278
VI 金融政策の評価	281
1 金本位制下における金融政策	281
2 ケインズ『一般理論』からアコードまで	282
3 「金融政策の復活」以後	284
4 1970年代	287
〔演習問題〕	289
〔参考文献〕	289

基礎経済学大系 金 融 論

第1章 貨幣の定義と機能

【概 説】

経済財の交換は貨幣が導入されることによって、物々交換に比べて飛躍的に発展した。だが、貨幣の存在が経済に与えた利点はこのことだけにとどまらず、経済主体の支出活動を合理的なものにし、また分業体制を可能にし、さらに貯蓄・投資を合理的なものにすることによって、経済の発展を促進している。貨幣が経済においてこのような重要な役割を果たしているにもかかわらず、経済学においてそれに相応した評価が与えられてこなかった。

貨幣概念の論理的発展過程を考えると、貨幣は実体的価値をもつ商品貨幣から名目貨幣へと進化してきた。だが近代的な銀行組織が発達したのに伴って、銀行の要求払預金が貨幣として機能するようになり、これを預金貨幣とよぶようになった。さらに、第2次大戦以後貯蓄預金業務のみを行なう「金融仲介機関」が発達し、それが創出する債務の貨幣との類似性がきわめて強いいため、それらのものを準貨幣として考察の対象に入れるようになった。

貨幣の機能は一般に(1)価値の尺度、(2)交換手段、(3)価値貯蔵の手段だとされているが、最近の分析では価値貯蔵の手段としての機能に関連して、貨幣を第一義的な重要性をもつ特別の資産ではなく、種々の異なった流動性をもつ諸資産のなかで、最も高い流動性を保持する資産だとする見解が有力になってきている。このような側面からみた貨幣を資産貨幣とよんでいる。

これまで、経済分析における貨幣の重要性は主として貨幣量の問題としてとらえられてきたが、それと同時に貨幣がどのような経路を通じて供給されるかということも同等に重要だと考えられるようになってきた。このためには日銀の資金需給実績などによる貨幣供給経路の考察が重要になる。